

# 幼児と自然環境との関わり

——身近な散歩コースにおける3才児と自然との出会い——

棄 原 昭 徳

Communication between Child and Nature

—— Discovering the Nature by 3 Year's Child in Walking Course ——

Akinori KUWAHARA

( Received September 18, 1991 )

## 1. はじめに

1990年10月21日のことである。3才1か月になろうとするM児が、自分の足もとに転がっていたひとつの小石をひろいあげて頭をかしげた。その小石を見ながら「化石かもしれん。洗ってみよう」と独り言をいった。つづけて「葉っぱかもしれん」ともいった。つまり「この小石が葉っぱの化石かもしれない」というのである。やがて家の中にいる小学校5年生の兄に見せにいった。しかし、すぐに「化石じゃない」とひき返してきた。

ちょうど同じ時期、ジュズダマ（数珠玉）が色づいたところにM児と一緒に家の近くを歩くことがあった。小学校1年生くらいの女兒が、おばあさんとふたりでジュズダマの実を集めている。筆者とM児は、しばらくその様子を見ていた。不意にM児が「きょうも風が吹きよる」とつぶやいた。その声にうながされて辺りを見まわすと、たしかに背たけの高いカヤの葉が風にそよいでいたのであった。予期しない詩的な言葉に出会ったものだから、筆者は「ほんとじゃね。吹きよるね」と応答するのが精一杯であった。その場に居合わせたおばあさんとたがいに顔を見合わせたことであった。

幼児は、こんなかたちで自然の事物に出会うのである。

M児が「化石かもしれん」とひろいあげた小石と同じようなものは、いままM児の身近に無数に転がっている。しかし、M児はもう小石をひろいあげようとはしない。同じようにジュズダマも、今年もすでに青い実をつけはじめているし、同じように微風も吹いているのに、M児はもう「風が吹きよる」とはいわない。

幼児は、自然の事物との個性的で劇的な出会いをするのである。

1989（H.1）年3月15日、文部省告示第23号としてだされた『幼稚園教育要領』では、「環境を通した教育」が前面に提起され、「身近な環境とのかかわり」にかんする新しい領域として「環境」という名称も用いられはじめた。

おなじ日、文部省告示第24号としてだされた『小学校学習指導要領』中の生活科の目標において「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然との関わりに関心をもち」と述べられている。

「身近な環境とのかかわり」といい、「自分と身近な社会や自然とのかかわり」というのであるが、それでは、子どもは「身近な環境」としての「社会や自然」と、具体的にどんな形でかかわりあい、出会うのであろうか。子どもたちが身近な環境としての自然に出会うとき、保

育者や教師は、どのような配慮をしなくてはならないのであろうか。また、幼児教育や小学校低学年教育において「身近な環境とのかかわり」を学習活動の一環として位置づけようとするとき、すでに身近な地域の「マップづくり」や「暦づくり」が実施されているが、具体的にはどのようなカリキュラム化が可能となるのであろうか。

筆者は、3才の男児がみずから「散歩」とよぶ活動を、約100日のうちに、のべ40回から50回にわたって共にすることができた。1991年5月下旬から8月下旬にかけての期間である。この「散歩」は、多くの場合、10分ないしは15分程度であるが、日によってはコースを歩くだけで10分もかからないこともある。しかし、土曜・日曜のように時間的に余裕があったり、珍しいものに出会うことがあると、散歩は1回ではおさまらず数回にわたり、合計すると2～3時間にもおよぶこともあった。

それはひとりの子どもの、文字どおりの「身近な環境とのかかわり」であり、「自分と身近な社会や自然とのかかわり」であった。

そのうえ幸いなことに、つぎの二つの条件がこの調査を実施するにさいして役に立った。

ひとつは、「散歩」のときのM児ひとりの様子を継続的に観察できたことである。この散歩が始まったころ、ほとんどの場合、M児と筆者との二人だけで散歩することになった。のちに次男のH君がくわわり、たまに長男のN君がくわわることもあった。しかし、いずれの場合も筆者が立ち会うことになったのである。

たとえば、こんな場面があった。9月8日の夕刻、外出しようとした筆者を目ざとく見つけたH君とM児が「お散歩に行こう」と声をかけてくれた。ほかに約束の時間があったので「すぐに行かんといけんのよ」というと、ふたりが「ああ！」と声をあわせて残念がった。そして「また行こうね」とつづけ、「行ってらっしゃい」と声をかけてくれた。ふたりは、そのまま遊びをつづけて、自分たちだけで散歩に行くようすはなかった。このように「散歩」は筆者と行くという暗黙の約束ができあがっていたようである。

もうひとつは、そのM児の活動を、片道たった65メートルのひとつの場所に限定して、何度もくりかえして観察することができたことであった。

ひとりの幼児の「散歩」とはいうものの、そこには、自然とのかかわりとともに、観察者および周囲の大人のひとりとしての筆者とのかかわり、さらにはM児の父親・母親・ふたりの兄弟とのかかわりというように、自然との出会い以外のさまざまな要因が絡みあっている。本論では、M児の散歩コースでの「身近な自然」との出会いやかかわりに限定して、考察をすすめる。つまり、本論は、ひとりの幼児の、ひとつの場所における100日あまりの定点観測の記録と考察でもある。

## 2. M児のプロフィール

M児は1987年9月26日生まれの子供である。本論で主要にとりあつかうことになる「散歩」は、1991年の5月下旬から8月上旬に集中した。その時期は、M児の3才8か月から3才11か月までの期間にあたる。

M児の家族構成は、両親と男児ばかりの兄弟3人である。M児は3人の兄弟の末っ子である。父親は農業関係の役所に勤め、母親は公立保育所の保母として勤務されている。子育てのためには労を惜しまない模範的な両親である。(注1) 長男のN君は小学校5年生、次男のH君は同じ小学校の2年生に在学中である。M君も、家に近い保育所の3才児クラスに通っている。

3年前の1988年7月31日、筆者は現在の住所に引っ越してきた。M児の住む家は、筆者宅の隣に接している。隣といっても、境界線をしめす高さ10センチばかりのブロックだけで区分された宅地であり、それをのりこえてたがいに突き合ってきた家族同士でもある。はじめて出会っ



散歩道の右下には、0.5メートルばかりの斜面があり雑草が茂っている。その下にはセメント製の側溝が並行して流れている。溝は幅0.5メートル、深さ0.5メートルであり、いつも水が流れている。約65mの側溝の落差はおよそ1mである。だから雨のあとなどは小石を押し流すくらいの勢いで水が流れる。

側溝の右手は、池の土手になっていて、高さ2メートル前後の急な土手には雑草がおい茂っていて、その土手をのぼることはできない。コース①の終点は池のそばに出ることができ、池の水面を眺めることができる。

この散歩道は水田の耕作者によって、草刈りや簡単な補修がおこなわれ、ときに歩きやすくなる。

散歩をはじめ当初のコースは①の部分に限定されていた。しかし、M児がこのコースに慣れるにしたがって、M児の「あっちへ行ってみよう」という言葉を契機として、時間に余裕があったり、M児が行きたいというときにかぎって、②の部分が付け加わることになった。

さらに、のちになって③のコースが付け加わった。

しかし、①のコースは、いつの場合であっても必ず最初に散歩することになっている。

散歩コースは、家を出て100メートル前後の距離を歩くにすぎないが、幼児の散歩コースとしては変化に富んでいる。

#### 4. 散歩の始まり

1991年5月下旬、このころ筆者は夕刻には自宅にいたことがつづいた。

夕方6時過ぎになると玄関のインターホンがなり、M児がやってくるようになった。つい先日まで、このインターホンのボタンに手が届かなかったM児であるが、この時期よりインターホンに手が届きはじめ、ときに遊び道具として使うこともあった。

それを契機としてM児は筆者に「散歩に行こう」と声をかけるようになった。記録によれば散歩は5月20日より始まっている。

後日、母親によれば「車から降りると、家に入らずそのままインターホンに直行する」ということであった。のちには、筆者の車のあるなしをみて「おじちゃん(＝筆者のこと)がおる」といってインターホンに向かうようになったという。(注2)

散歩が始まったころ、仕事から帰られたばかりの母親は夕食の支度でいそがしいであろう、だから、10分や20分くらい子どもを相手にすることぐらいは自分にもできる、そのうえ幼児を少しでも知ることができればよいがというくらいの気持ちではじめた「散歩」であった。手元の記録によれば、5月20日から4日ほど連続して散歩をしたことになっている。これを契機に散歩が定例化しはじめたのであった。

#### 5. 散歩の行き帰り

6月に入ると、散歩に出かける回数が多くなった。

このころは、散歩といっても、夕方にM児が帰ってきたあと、いつものコースを歩くだけである。だから時間にして10分にみたないことが多かった。

6月なかばの2週間、母親の車を降りたM児は、自分の家に入るまえに、そのまま私の家のインターホンに直行してきたという。

インターホンでは、つぎのような会話が繰り返されてきたのである。

夕方6時すぎ、母親の車からおりたM児は、そのままインターホンに向かう。

インターホンがなる。

家人「はい」

M児「くわはらのおじちゃんいる？」  
家人「はい、おりますよ。ちょっと待ってね」  
筆者「はい、どなたですか」  
M児「はく」  
筆者「はくではわかりません。どなたですか」  
M児「〇〇〇・〇〇〇です」(きちんと自分の氏名をなのる)  
筆者「きょうはどんな用事ですか」  
M児「散歩」  
筆者「すぐ行くから、待ちよってね」  
こんな会話のあと、散歩にでかけることになる。

M児が保育園や祖父の家から帰ってくる夕方の時刻に、筆者がいつも家にいるというわけではない。不在のときには、つぎのような会話がなされるという。

5月26日、私のいないときの夕方、家人との会話は次のようであったとのことである。  
インターホンがなる。

家人「はい」  
M児「くわはらのおじちゃんいる？」  
家人「今日は、いないんよ」  
M児「うん、わかった」  
家人「またね」  
M児「うん」  
そして自宅に帰っていくのだという。

散歩はいつも次のようにして終わる。

散歩がおわって家のまえにくると、「またね」といって別れることになる。

M児は「ただいまあ」と大きな声で自宅の玄関をあける。すると「おかえり」というM児の母親の声が聞こえる。それを聞きとどけて筆者も「ただいまあ」と自宅のドアをあける。

M児が当初から大きな声で「ただいまあ」という挨拶ができていたわけではない。ある日「どうやって家に入るんかね、聞いてこうね」という筆者の言葉をきっかけにしてM児の声が大きくなったのであった。以来、筆者も大きな声で「ただいまあ」ということにしている。

## 6. 散歩の経過

5月下旬から8月下旬までのおよそ100日間、M児との散歩はつぎのような経過をたどることになった。

5/20・21・22・23

この週は夕刻に家にいることが多かったので玄関にインターホンがよく鳴る。

このころから散歩が定例化し、散歩が徐々にコース①にしぼられてくる。

5/24 池の近くまで散歩(池にニシキゴイ2匹、溝に笹舟を流す。)散歩に活気がでる。

5/28、6/8・11 散歩。

6/12 散歩。M児「おじちゃん(筆者)を散歩に連れていってくるからね」。

6/15・20 散歩。

6/22 散歩(初めて亀を発見、数日前まで雨が降りつづいていたせいかな)、夕方3回散歩。

6/23 散歩(日曜朝10時、玄関のチャイムボタンがおされて、約束どおりM児来る)。

- 6/24 桑原、コースを調べながら散歩。夕刻、兄弟3人と散歩。  
6/26・30 兄弟3人で散歩。  
7/1 夕方暗くなってM児「網を買ってもらった」と見せにくる。  
7/3 17時20～40分、M君と散歩。網をもって得意な様子（新しい展開）。  
7/5 17時15分より散歩、雨靴を履いて「溝に入りたい」、溝の中を歩く。  
7/9・10 散歩。  
7/13 散歩、「おじいちゃんを見にきてね」、M児、玄関の靴を揃えてかえる。  
7/14 昆虫図鑑を購入する。子どもたちにも見せる。散歩。  
7/20・22 散歩。  
7/25 夕刻、M児・H君との3人で散歩。シオカラトンボをもって「(本で)調べよう」  
7/30 カブトムシ「羽があるんよ」、散歩、オオシオカラトンボ。  
8/1 13時35分より10分間だけ散歩。  
8/6 兄弟3人、筆者宅へ上がる。M児「ぼく、おじちゃんと仲良しねえ」。  
8/8・14 散歩。  
8/31 次男H君、M児との3人で散歩、M君が自力でチョウを捕らえることができる。  
9/1 昼ごろ「カメがおったあ!」という子どもの声。M児「見においでえや。」  
午後、散歩。M児「石が動いたと思ったら、カメだったんよ」。  
9/7 12:45-12:50 H君、M君との3人で小雨の中を散歩。  
M児「ぼくも名人になったよね、灰色のチョウチョ取ったから」。

以上のように、5月下旬から9月上旬までの約110日のあいだに、記録にあるものだけで34回の散歩を共にしたことになる。このなかには、6月22日の土曜日のように、1日のうちに4回もでかけたこともある。さらに、記録にとどめることのできなかつた偶発的な散歩も何回かふくまれている。

結局、この110日のあいだにでかけた散歩は、のべ50回は軽く越えるはずである。

## 7. M児と自然物との出会い

散歩が定例化して1か月が経過した6月22日の午後、偶然にも「カメ」を発見することになった。予想もしなかつたカメの発見が原動力となって、M児との散歩はカメを捜して捕獲することが主要な目的となり、2年生のH君も加わるが多くなった。これまでの散歩の質を変えるほどに、カメは子どもたちをひきつける存在であった。

この週の前半には雨が降りつづき、気温も湿度も高くなるという好条件に恵まれたこと、さらに、畦道の整備がなされて見えやすくなったことなども加わって、たくさんの自然物に出会うことができた。6月22日（土曜）と23日（日曜）の両日、M児が出会うことになった小動物や植物などの自然の事物と名前とM児のかかわり方を、出会った順番に列挙する。

6月22日（土）

13時20分ころ自宅の庭先にいると、M児が母親の車に乗せられて帰ってきた。

この日も、筆者の姿を見たM児は車から降りると、自分の家に入らずにそのまま私のところに来て「散歩に行こう」と声をかけてくれる。

この日の第1回目の散歩はM君とふたりきりで行くことになった。

### ①アメンボ

散歩コースの入口の右手には、上方の池から溝へと落ちる「流れこみ」がある。その

部分では、わずかながら流れがよどんでいる。この時期、この流れこみには、いつもアメンボがいる。この日、5・6匹から10匹くらいのアメンボがいる。

筆者が「何匹いるかねえ」とたずねると、M児は「1、2、3、・・・」と数えるが、その声と指さすアメンボの数とは対応していない。

M児はアメンボを見て「アメンボは雨がふると喜ぶんよ」という。どこかで聞いた話だろうか。それとも、アメンボの「アメ」と「あめ（雨）」の音の響きが重なるのだろうか。

②ミミズ

おなじ流れこみの底には、長さ10cmばかりの大きなミミズが2匹、泳ぐように動いている。これを見ていたM児は「ミミズが泳ぎよる」といった。

③イトトンボ

イトトンボが1匹静かにとんでいる。胸部と尾部には、黒地に鮮やかな水色の縞模様のはいったイトトンボである。とりわけ尾部の水色は鮮やかである。体長3cmくらいで小さく、羽は透明である。そのうえ、溝のかぶさるように生えている草の陰をゆっくりと飛ぶので、黒色が保護色の役割をして、小さな子どもには見えにくい。M児は気付かない様子なので、「イトトンボがおるよ」と指さして教える。しばらくイトトンボのあとを、いっしょに追いかけて見ながら見る。

④オタマジャクシ（ツチガエル）

入口より畦道を25m進むと、左手の水田には水がたたえられている。畦道にそって歩くと、体長3～4cmのオタマジャクシが水を濁して隠れようとする。畦道ちかくの見えやすいところにいるオタマジャクシの数は少ないが、M君が見つけて「あっ、オタマジャクシがいる」と教えてくれる。

⑤ヘビ

いつもの散歩道の折返し地点では、土手のうえから池をながめることにしている。池の土手にあがりかけの草むらで、何かごそごそと動いた。長さ50センチメートルくらいの、細く黒いヘビである。M君にとっては怖いらしく、一瞬うしろにさがったが、逃げていくさきをふたりで眺めた。

⑥コイ

朱色に黒の模様のはいったコイが1匹、池の中で泳いでいる。体長は50cmくらいか。土手の草がじゃまになってM君の高さからは見えない。抱きかかえて、遠ざかっていくコイを見る。

以前にもっと大きなコイを、ふたりで見たことがあるので、「おったねえ」「このまえのとは違うねえ」などといいながら見る。

⑦土・石・草（溝に流す）

池の土手ちかくの水たまりで、H君が土手の土を水の流れに投げた。それを見ていたM君は「実験じゃ」といって、自分も土を投げこんだ。土は「色水」となって溝を流れていった。帰り道では、草や小石をさかんに流れの中に投げこむ。カメを発見したのは、その直後である。

⑧カメ（ミミアカガメ）

いつもの散歩コース①をおりかえす。帰り道のなかばのところで、何気なく溝の中を見る。すると、大きなカメが甲羅を下にして仰向けになっている。すぐにM児に教える。M児と「カメがおった」といいながら、ふたりの兄たちに知らせに行く。仰向けになっているので、しばらく逃げることはないであろうと思いつつながら。

あいにくふたりの兄たちは、留守でいない。そこで、取っ手の長い塵取りをもって、ふたたびカメのこともどる。カメは、すでに下流に向かって歩いていて。追いかけていくと、すぐに草の陰にかくれようとする。どうにか塵取りのなかに追い込むことができた。

畦道を帰るとき、M児も塵取りの取っ手をもってくれる。「ぼくが手伝っちゃげる」といって、運ぶのを手伝おうとする。

大きなタイヤに入れたところで、ゆっくりと観察する。頭の部分に赤色の筋が入っていて、これまでに見たことのあるカメではない。次男のH君が父親といっしょに帰ってきた。お父さんによれば「アカミミガメ」だということであった。縁日の露店などで売られている「ゼニガメ」が大きくなったものだとされる。南米産のカメであるという。

夕刻、陽もながいので、ふたたびM君、H君、私の3人で散歩に行くことになる。子どもたちの目当てはカメであるが、溝の中にはカメの姿はなかった。

散歩コース①の終点にの池のふちにハナショウブが黄色の花をつけている。その花を取ろうと近づく。すると、根元に小さな亀がいるのを、H君が目ざとく見つけて「あっ、カメがおる」とさげんで、つかみあげた。クサガメであった。H君は片手でカメをつかみ、凱旋將軍のように勇んで先頭を歩いた。M児も嬉しそうで、「ぴょんぴょん」と跳ねるように歩いた。

カメの発見がよほど嬉しかったのであろうか、この時点からM児は私としきりに手をつなごうとする。

夕刻の散歩のあと、タイヤのなかのカメが頭を出しているのを見ようということになり、M児も足音を忍ばせて近づく。

カメを2匹も見つけることができたということもあって、この日の散歩は夕方にも3度ばかりでかけることになった。

また、カメの発見が、これまでの散歩を変質させることになった。しばらくのあいだ「カメを捜すための散歩」になったのである。

#### ⑨シオカラトンボ

散歩コース③の終点、流れが田んぼに入るところに、1辺3メートルくらいの三角形をした水たまりがある。子どもたちは「沼」と呼んでいる。シオカラトンボが数匹飛んでいる。この時点では、まだ「トンボ」である。

#### ⑩水たまり

この水たまりをH君は「沼」と呼んでいる。田の畦から約40cmほど低くなっているの、幼児にとっては危険である。2年生のH君だけが回りの土手を歩いて行ったが、M児もおそろおそろ行こうとする。「落ちたら危ないからね、おじちゃんがいるときだけよ」という約束で、1周させる。M児は、両手を横に広げバランスをとるように、ゆっくりと慎重に歩く。歩きおわると嬉しらしく、筆者を見てにっこりとほほえむ。そして、もう1回挑戦しようとする。私が「もう1回よ」というと、M君は「2回ね」と2本指をつきだす。

M児が「ぼく、H君になりたい。強いから」という。

最後の散歩では、暗くなりかけたので「ホテルをさがしにいこう」ということになる。コース①の入口付近では、去年たくさんのホテルを見ることができたからである。

M君が「ホテルは、お尻に電気がついちよるんよ」という。

筆者「M君は、お尻に電気がついてないね」というと、「ホテルじゃないから」という名答がかえってきた。あとで母親にたずねると、先日、ホテルを見に行ってきたのだという。



別れぎわ、翌日の朝、またカメをさがしに行くという約束をすることになる。あくる日の朝は、筆者を起こしてくれるというのである。この日が夏至ということで、夜は8時ちかくまで明るい。

6月23日（日）

朝10時、玄関のインターホンのボタンがおされて、外で話し声がする。

昨夕の約束どおり、M児たちがやって来たのである。M児が「散歩に行こう。もう朝。もう朝になったよ。おそいよ」と元気な声で叫ぶ。

散歩に出かけるまえに、前日にとったカメを見に行く。M児は「まだ生きとる」と教えてくれる。

前日の散歩では、たくさんの生き物に出会った。M児は前日のことを思い出したらしく「あの大きなカメは、くわあらのおじちゃんが取ったんよね」といつてくれる。

全コースを散歩する。前日に出会った自然の事物のほかに、この日に出会った事物を次にあげる。

溝は昨夕よりも水かさが増えている。

#### ⑪草（流れの中で動く草）

M児はさかんに草をむしり取っては、溝に流す。「流れが速い」、「すごい流れが速い」、「こりゃどうだ」などといつては草を流す。

水面に垂れ下がっている草が流れに触れて、左右に動いたり、上下に震えるような動きをしている。M児は「草が震えよる」と表現した。

途中でふたたび昨日の亀の子のことを思い出したらしく「クサガメはH兄ちゃんが取って」という。

散歩コース①の終点にある小さな橋を渡るとき「橋を渡るぞ」という。

前日の泥を流す「実験」をしたところでは、同じように泥をすくって流す。スギナを流したとき「くるくるまわる」、「あっ、吸い込まれていく」という。

#### ⑫ツチガエル

帰りの畦道では「ここにザリガニのうちがあった。もう、ない」という。

田の中にはツチガエルがいる。「逃げる、逃げる」という。

#### ⑬オオバコ

M児が畦道にあった大きなオオバコをみつけて、「こいつは強かったなあ」といつて、オオバコの穂の茎の部分をはきぬく。これまで何度かしてきたように「ねえ、お相撲しようよ」といつてくる。オオバコの穂の部分からませて引っ張りあいをする。

この2日間の散歩の中で、M児が直接かかわった自然の事物は以上の13種類であった。

子どもたちがかかわる可能性のある自然物は、ほかにもたくさんある。散歩コース①には、ほかにどのようなものがあるのか。翌日の6月24日、15時から30分ほど、大人目で散歩コースを歩いてみた。幼児の目につきやすい小動物、花が咲いていたり身近な植物を中心に、30分のあいだに見つけることのできたものは次のとおりである。

小動物

アメンボ  
 モンシロチョウ  
 ダンゴムシ  
 オタマジャクシ (水田)  
 クモ (巣を張っている、3か所)  
 トンボ (イトトンボ緑色2匹、コシアキ  
 トンボ1匹)  
 ケムシ  
 ガ (黒字に白模様のメイガ)  
 テントウムシ2種類  
 フナ (池の中に約20匹)  
 アゲハチョウ  
 バッタ  
 カマキリ (小)  
 ツチガエル  
 ハチ (小)  
 ツバメ  
 水鳥 (池の中、茶色、40-50cmくらい)

18種類

植物

タラノキ  
 オオバコ  
 カヤツリグサ  
 スギナ  
 アザミ  
 ツユクサ  
 ミゾソバ  
 カヤ  
 スイバ  
 ヨモギ  
 クローバ  
 ワラビ  
 イヌタデ  
 ヒメジョオン  
 カキドオシ  
 ジュズダマ  
 キショウブ (黄色の花)  
 ヒシノミ  
 ノバラ  
 ヤブカンゾウ  
 ササ  
 イヌガラシ

22種類

全部で40種類、小動物と植物はほぼ同数であるといつてよい。

6月22・23日以外の散歩において、M児が出会うことになった小動物や植物は次のとおりである。かわり方も簡単に付記しておく。

①クサガメ (6月22日のミミアカガメ、クサガメにつづいて、兄のN君、H君が1匹ずつ見つける。M児が「もう1匹仲間おらんかねえ」といつていた矢先であった。M児は、兄たちの世話の仕方や持ち方を身近に目撃する。M児はカメを恐れることもなく、よろこんで上手に持つことができた。飼育している容器を掃除しているあいだ、カメが逃げないように番をするのはM児の役目である。カメは夜のうちに逃げ出していなくなることもある。M児は散歩のたびにカメの動静を教えてくれた。

9月1日の昼、「カメがおったあ!」という子どもの声がある。長男のN君がカメを見つけたのだという。2階の部屋から「おじちゃんにも見せて」と声をかけると、その声を聞きつけたM児が顔を見せて「おじちゃんも降りておいでえや」と誘う。カメを見にいこうというのである。しばらくしてカメを見せてもらおう。家から出てきたM児にカメを見せてもらったあと、どこにカメがいたのか教えてもらうことになった。家からの散歩道の入り口の流れこみまで、手をつないでいく。そのときM児は「石が動いたと思ったら、なんと、カメじゃったんよ」とむつかしい表現をした。おそらくN君の使った言葉であろう。

このシーズン中、子どもたちが捕獲したカメの数は、のべ10匹近くになる。

②アマガエル（体長2cmくらい。溝の上の草むらや、溝の中にいる。周囲の草と同じ保護色なので、幼児には見えにくいようすであったが、のちには、すぐに見つけることができるようになった。手で捕まえることもできはじめた。

アマガエルが、ゆるやかな流れに飛び込み、流れにそって泳ぎはじめるのを見て、M児が「ぼく、かえるになりたいな、泳げるから」といった。さらに「N兄ちゃんも、H兄ちゃんも、お父さんも、お母さんも、くわわらのおじちゃんもかえるになれるといいな。いっしょに泳げるもん」とつづけた。）

③ドンコ（体長10cm近くのハゼ科の淡水魚で、溝で見た唯一の魚類である。ドンコを見たM児は「お魚がいる」と小さな声でささやく。大きな声を出すと魚がにげてしまうということを知っている。小5のN君が傘で取ろうとするのを見ることになる。これを機に虫とり網を購入することになる。）

④ウシガエルのオタマジャクシ（池にはウシガエルがいて、夜になると鳴く。散歩コース入口にある流れこみの上方には、ウシガエルのオタマジャクシがいることがあった。体長は10cmをこえる大きなオタマジャクシである。100日あまりの間に3匹を捕まえることができた。そのうち1匹は流れこみにいたものを筆者とM児と一緒にすくった。M児の喜びようはたいへんなもので、すぐに「お母さんに見せる」といって持ち帰り、容器に入れた。おそれることもなく手でつかみ、水を入れる。カメがかくれるための小石を入れるなどの世話もした。二人の兄がカメの世話をしているのを見ていたからであろう。）

⑤オオシオカラトンボ（シオカラトンボはもっとも多く見かけたトンボであった。シオカラトンボを手を持ったM児は「とんぼが噛んだら痛い」「とんぼは力がある」などといった。ときに、オオシオカラトンボも捕れた、のちにシオカラトンボとの違いを図鑑で調べ、母親にも教えることになる。シオカラトンボ、オオシオカラトンボの発音もはっきりとできるようになった。

⑥ムギワラトンボ（この期間中に2匹ほど捕ることができた。うち1匹の尾部には卵がついていた。M児は「あっ、卵がついとる」と声を上げた。

どんな小動物も必ずM児に持たせるようにした。ときには、M児みずからが網の中から取りだして、自分でつかむこともあった。そのあと「逃がしてもいい?」「いいよ」との会話があった。逃がすことになる。最初のうちトンボやチョウを強く握りすぎて圧死させたり、弱らせることもあったが、すぐに羽だけを上手につかむことができるようになった。）

⑦アカネトンボ（100日あまりの散歩期間中のほぼ全期間にわたって見かけることのできたトンボである。高く、遠い場所を飛ぶので幼児には見分けにくい。しかし、3匹ほど連続して捕ることのできた日があった。この日以来、筆者はM児から「とんぼの名人」という名誉ある名称をもらうことになった。このほかにオニヤンマ・コシアキトンボ・アカトンボ（ショウジョウトンボ・マユタテアカネの2種類）を見かけた。）

⑧ザリガニ（雨のあと、小2のH君が2匹見つける。M児も「おった、おった」といって喜ぶ。）

⑨ジョロウグモ（8月に入ってジョロウグモが目立ちはじめた。多い日にはコース①に5～6匹もいることがあった。いちどトンボがジョロウグモの巣にかかり、羽だけが残っていた。M児は「かわいそうじゃねえ」と筆者にいった。）

⑩カタツムリ（葉の裏や蔭にかくれているカタツムリを見つけて「あっ、カタツムリがおる」と教えてくれる。カタツムリを見たのは2度だけであった。）

⑪ヒメジャノメ（いつも身近に飛んでいる。M児が自力で捕獲した最初のものである。このほかに、アゲハチョウ、クロアゲハ、アオスジアゲハ、アカタテハなどを見かけたが、飛ぶのが速くて幼児にとっては指さすことのできる存在ではない。）

⑫ダンゴムシ（多くは家の近くで見つけていたが、散歩道でも「ダンゴムシがおる」といって

つまみあげる。)

⑬カマキリ (体長2cmくらいの小さなもの。)

⑭コオロギ (溝の壁をはいあがろうとしていたコオロギを網で捕まえてM児に見せる。)

⑮オンブバッタ (草の色と同じで見つけにくい、体長2cmの小さなもの。)

⑯タラノキ (散歩コースの入口近く、葉柄に2cmばかりの鋭い針のついたタラノキが数本ある。これにはM児と一緒に「針の木」という名前をつけた。はじめてこの木に気づいたときM児は「あたったら痛いねえ」といいながら、指を針の先にあてる動作をした。ときに「痛い」と手を引っ込めることもある。のちには鋭い針の部分をもって引っ張り、上手に針だけをとるようになった。)

⑰エノコログサ (期間中6~7回くらい、茎から引き抜いたり、穂の部分をちぎり取ったりした。「ケムシ」と名前をつけている。)

⑱ヒシノミ (散歩コースの右上にある池には、ヒシが表面を覆っている。大雨のあとヒシノミを散歩コースで見つけることができた。M児が「これなに?」とたずねたので、「ヒシノミよ」と教える。するとM児は「あそこにもたくさんあった」といって、池の下の流れこみを指さした。気をつけて見ると、溝や草むら、道にもたくさんのヒシノミが転がっている。取りあげて「固い」、「痛い」という。)

⑲ジュズダマ (ポケットにジュズダマをひとつ入れていたM児が「ジュズダマ」といって見せてくれる。お父さんに取ってもらったという。)

散歩コースの入口近くにはたくさんのジュズダマが青い実をつけている。「これなに?」とたずねたので「ジュズダマよ」と教える。

⑳カワラナデシコ (ピンクの花が3~4か所で咲いた。溝のすぐ上に咲いた花をみて「きれいなねえ」という。筆者が「とろうかね」というと、「うん、とって。お母さんにもってかえる」という。のちに「お母さんのプレゼント」という言葉もでる。)

㉑イネ (田植えをしたばかりのころの苗をみて「ちっちゃいねえ」という。苗が大きくなったころ筆者が指さしながら「これはなにか知っちゃう?」とたずねると、「米ができるんよ」という。イネがM児の身長近くに成長したころ、「米が大きくなったねえ」と、さも感心したような口ぶりである。そのあと「僕のほうが大きい」という。)

㉒小石 (畦道に転がっている石をとりあげては「このやろう、こいつめ」といいながら投げる。それ以前の散歩の中でへびをみかけたときに、H君たちが石を投げたときの記憶でもよみがえったのであろうか。石投ぎは4~5度ばかり集中したが、あとでは見られなかった。)

㉓「川 (溝の上流)」 (いつもより上流の散歩コース③に初めて行ったときのことである。)

M児「おじちゃん、(川が)どこまで続くかねえ」とたずねる。そのあと、実際に行ってみる。)

㉔雷 (近くで急に雷が鳴りはじめたことがあった。散歩は中止となった。「かみなり、こわい」と叫びながら走って家にかえる。)

以上のM児のかかわった自然の事物を、「小動物」と「小動物以外」に区分してみる。ただし、「小動物以外」のうち、特定の植物としてかかわったものには\*を付した。

### 小動物

(6月22・23日)

- ①アメンボ
- ②ミミズ
- ③イトトンボ
- ④オタマジャクシ (ツチガエル)

⑤ヘビ

⑥コイ

⑦カメ (ミミアカガメ)

⑨シオカラトンボ

⑫ツチガエル

(6月22・23日以外)

①クサガメ

②アマガエル

③ドンコ

④ウシガエルのオタマジャクシ

⑤オオシオカラトンボ

⑥ムギワラトンボ

⑦アカネトンボ

⑧ザリガニ

⑨ジョロウグモ

⑩カタツムリ

⑪ヒメジャノメ

⑫ダンゴムシ

⑬カマキリ

⑭コオロギ

⑮オンブバッタ

### 小動物以外

(6月22・23日)

⑧土・石・草 (溝に流す)

⑩水たまり (沼)

⑪草 (流れの中で動く草)

⑬オオバコ\*

(6月22・23日以外)

⑬タラノキ\*

⑰エノコログサ\*

⑱ヒシノミ\*

⑲ジュズダマ\*

⑳カワラナデシコ\*

㉑イネ\*

㉒小石

㉓「川 (溝の上流)」

㉔雷

---

13種類 (うち植物は7種類)

### 24種類

6月22・23日の両日、M児の関与した小動物は9種類であった。しかし、植物へのかかわりは、オオバコ1種類だけである。前に記したように、翌日の調査によって、筆者の目についた植物は、動物の18種類よりも多く、22種類もあることが判明した。やはり幼児は動くものへの関心が高いのである。植物は、動物に比べて静的であり、バックグラウンド (背景) の役割をされていて気づきにくいのであろう。

雷、草の震えなどの自然現象については、その現象が生起したときだけ関心を持つことができるが、目の前にないとかかわりにくい。雷にしる、草の震えにしる、期間中に1回しか生起することはなかった。

自然の事物の出会い方にも、いくつかのパターンがある。

第1は、カメ・ザリガニ・ウシガエルのオタマジャクシのように、いつもはいないが、いると見るだけで取りたくなるようなものである。物そのものが幼児を「ひきつける力」をもっているのである。これに近いものとしては、ドンコなどの魚類がいる。植物の中ではカワラナデシコの花が、その役割を果たしただけである。

第2は、トンボやチョウのように、簡単に見かけることができ、捕獲したり、かかわるこ

とが容易にできるものである。この中には、ほかにアマガエルがいた。植物ではタラノキの針、ジュズダマの実である。両者とも、幼児の目につきやすい特徴をもっている。

第3は、過去に何らかのかかわり方を教えられたり、経験的に知っていたといわれる物事である。動物ではカタツムリ、ダンゴムシ、カエルなどである。植物では、エノコログサの穂を「ケムシ」と見立てたり、オオバコの穂の茎を使つての「相撲」などがこれにあたる。

第4は、子どもは気づくことが困難であるが、周囲の大人や年長の子どもによって教えられることによって、見たり、触ったりすることのできる物事である。これには、イトトンボ・カマキリ・オンパバッタなどのように、幼児が簡単に見つけることのできない小動物がふくまれる。ほとんどの身近な植物もこれに入る。自然の中の植物は、そのままでは幼児の関心を引かない。

### 8. 「虫とり網」のもつ教育的意義

5月下旬に散歩が定例化して約40日のち、あたかも「散歩の道具」のように「虫とり網」をもって出かけることになった。

散歩に「虫とり網」が加わつたのは7月に入ってからである。きっかけは6月30日の散歩である。その日、小雨のなかを小5のN君、M児、筆者の3人が傘をさして散歩することになった。まだカメの発見の余韻が残っている時期で、この日の散歩もカメを見つけることが主要な目的であった。

流れこみに落ち込む溝の端にゴリを見つけた筆者はN君に教えた。するとN君は「ドンコじゃあ」と声をあげた。10cmばかりのハゼ科の魚である。しばらく3人で眺めたあと、どうにかして取ろうと考えた。とうとう持っていた傘で取ろうということになり、N君が下流から傘をもって近づいた。けれども「ドンコ」はにげてしまったのである。

この「ドンコ」は今年になって散歩コースの側溝で見た唯一の魚類であった。昨年にはメダカがたくさん泳いでいたのであるが、側溝の改修いらい見ることはできなかったのである。小さな流れに魚がいることがわかつたので、その日の夕刻、M児の母親に「網があるといいですね」と伝えたことであつた。

翌7月1日、夕方暗くなってインターホンがなつた。M児がやってきて大きな声で興奮ぎみに「ほく網を買ってもらつた」とわざわざ見せにきてくれた。もちろん「今度、これをもって散歩に行こうね」と約束したことであつた。

網は竹製の取っ手の部分が約1m、丸い針金の部分の直径は約26cmである。網の目は0.5mmくらいで、昆虫ばかりではなくて、魚もとることができる。

このようにして「散歩の道具」としての「虫とり網」が加わつたのであつた。網をもつての散歩は7月3日から始まつた。それ以来「虫とり網」をもつての散歩が今もつづいている。

網は、同じ物が3本購入してあつた。兄弟3人が1本ずつ使えるようにという配慮である。あとで詳述するように、このことがM児にとって、予想を越えた教育的な意味をもつてくる。

8月31日、散歩コースへの入口で、M児は、自分でもつていた虫とり網を使つて自分の力だけで、初めてチョウ(ヒメジャノメ)を捕らえることができた。「捕つた」と大声で叫んだあと、さっそく網のなかのチョウを取りだそうとしはじめた。しかし、網のそこから強く握つてしまつたので、外に取り出したときには、すでにチョウは圧死してつた。「お母さんに見せる」と言つていたが、それはかなわなかつた。

その直後、さらに散歩コースをすすんでいると、不意にM児は「ほく、チョウチョとりの名人なつたんよね」と誇らしげに言つた。

「うん、そうよ。チョウチョとりの名人になつたね」と筆者は答えた。

「おじちゃんは、トンボとりの名人よねえ」とつづける。

この場合の「名人」とは、ほんらいの「技芸にすぐれている」という意味ではない。3才児にとっては、自力でトンボやチョウを捕獲することはむづかしい。だから、それ以前には筆者がトンボを捕獲して、そのあと羽をM児に持たせたり、網の中にはいった状態で捕まえさせたりしてきたのであった。たくさん獲れたときにはM児の口から「トンボとりの名人」、ときには「トンボの名人」という言葉が使われてきたのであった。

自分の力で捕獲したのは、虫とり網を使い始めてちょうど60日目であった。かれの網は60日目にして本来の機能を果たしたことになる。たしかに、虫とり網の機能は、昆虫や小魚などを捕獲することであるが、この2か月のあいだ、網をもったときのM児の様子を観察していると、網は「昆虫や小魚などを捕獲すること」だけが機能ではないことがわかる。

それでは幼児の発達にとって、虫とり網のもつ教育的機能とはなにか。

それは、昆虫や小魚などを捕獲するという本来的な機能とともに、幼児にとっては「世界を捕獲するための道具である」ということである。

散歩に行くことが決まると、M児はすぐに自宅の玄関に立てかけてある網をもってくる。そして網の取っ手の部分にまたがるようにして歩く。取っ手の竹はアスファルトの路面にあたってゴリゴリと音がする。このとき、網は、あたかも元気よく駆けすすむ馬の役目をする。網の棒が「乗りもの」の役目をしているのである。

網をもって散歩に行きはじめると、M児は「ほくが先にいく」といって筆者のまえを歩くようになった。ことに当初は意気揚々と歩いた。このとき網は力や勇気を与えてくれる「如意棒」のようである。それは目の前にひろがる新しい世界に対処する「如意棒」であり、力を与えてくれる「魔法の杖」となる。

M児はときどき筆者や兄たちがするように、獲物はいないかと、網で草の上をたたいたり、草の根本をつついたりすることもある。網に追いだされて、トンボやチョウが舞いあがることもある。このとき網は、「探索棒」の役割を果たしている。それは世界探索のための「ゾンデ」であるといつてよい。

「子どもの手」は、世界を把握するための道具であった。(注3) 子どもにとって「虫とり網」は、手の延長として「世界を把握する道具」である。虫とり網は、手ではできない「世界」を把握するための道具である。それは人間の「手」と「世界」を媒介する道具であり、「身近な世界(環境)」を捕らえる道具である。

雨のなかや、溝のなかを歩く道具としての「雨ぐつ」、砂や土をすくいとる道具としての「スコップ」、紙を切る道具としての「はさみ」と同じように、虫とり網は周囲のものごとを捕獲したり、改造したり、認識する道具なのである。

オオシオカラトンボをとったときM児が「本で調べてみよう」といった。7月14日に購入して見せたことのある図鑑で調べてみようというのである。オオシオカラトンボはシオカラトンボによく似ていて幼児には同じものと見えるらしい。シオカラトンボと比べてみると、全体的に色が黒っぽいのと、羽の根元に黒の模様がついていることを教える。するとM児は、母親にトンボの図鑑を見せて、「これがオオシオカラトンボよ」と示すことができた。身近な環境のなかに図鑑などの「道具」があることも、新たな認識をえていくための原動力になることがわかる。

## 9. まとめ、散歩をカリキュラム化するために

### 1) 幼児の活動も自己発展の可能性を秘めていること

5月下旬、M児との散歩が定例化しはじめたときには、「歩くこと」が中心であった。散歩コー



すが、でこぼこの道であること、道の両側に雑草が茂っていること、さらに左手には水田の畦、右手には深い溝があり、幼児にとって歩きにくい条件がそろっている。M児も、でこぼこ道を歩くことに慣れていないので、「歩くこと」じたいが困難をともない、同時に歩くこと自体が散歩の目的であった。

それでも、徐々に周囲の様子をながめ、トンボやチョウなどの小動物に関心をもつようになった。6月23日・24日のように、カメをはじめとして、たくさんの小動物に出会うことができると、これが原動力となって、散歩は活発になっていった。この時期の散歩の目的は、もっぱら「小動物（カメ）を見つけること」であった。

そのうえに、7月に入ってからは「虫とり網」という道具がくわわって、散歩はなにか獲物をとりにいくという目的をもつようになった。その結果、カメ、アカトンボ、オタマジャクシ（ウシガエル）のように、継続的な飼育活動へと発展するものもある。

このように、同じ子どもの、同じコースでの散歩がくりかえされるのであるが、一度として同じ内容の散歩はなかったといってよい。一見すると単純にも見える活動であるが、この繰り返しによって、散歩活動が自己発展をとげていったのである。散歩は、9月中旬にはいってからもつづいている。

## 2) 幼児と共に「世界」を学び、発見すること

大人と幼児のかかわり方には類型化が可能である。

- a) 接触して一体化している状態（授乳児の母子関係、乳幼児を抱いて向き合っている状態等）。
- b) 一体化しながら、周囲の事物を見たり、かかわったりしている。
- c) 子どもと離れているが、対面して事物のやり取りをする（ボール、言葉のやり取り）。
- d) 子どもと離れているが、共に同じ対象にかかわっている。
- e) 子どもが自力で事物とかかわる（大人はその場で見守ったり、間接的に見守っている）
- f) 自立して、自主的活動が可能である。

散歩のときのM児と筆者の関係は、c)、d)、e)が中心となった。対面したり、同じ対象に共にかかわりながらも、ときに自力でかわるM児を見守っていたのであった。いわば、M児と共に自然の事物を見つめながら、同時に自然の事物にかかわっているM児を見つめていたのであった。

大人は単に幼児とかかわるだけではなくて、同時に、かかわっている子どもを発見するという二つの複眼的な視点をもちたい。二つの視点とは、第1に子どもたちとともに活動することで「世界」を学び発見することである。第2には、周囲の物事とかかわっている子どもをみることによって「人間」を学び発見するということである。

家庭や保育の場や学校で子どもと共に生活することは、たんに大人が子どもの世話をするというだけではない。それだけではなくて、「世界」と「人間」を学ぶことでもある。子どもの親・保護者、周囲の大人、とりわけ保育者や教師はこの二つの視点を持ちたい。

たとえば、この散歩を通して、筆者の身近にある道の自然を知ることができたし、自然にかかわる幼児を通して子ども（幼児）の敏感で鋭い感性や、人間の認識力に目を見張った。

身近な環境をカリキュラム化しようとするとき、その環境（世界）から学ぶと同時に、その環境（世界）にかかわる子ども（人間）から学ぶことを忘れてはならない。

## 3) 教育における「道具」の大切さ

散歩の自己発展をもたらしたもののひとつに「虫とり網」という道具があった。

すでに「虫とり網の教育的意義」のところでも述べたように、幼児にとっての網は、たんに「昆虫や魚を捕る道具」ではなかった。それは、散歩へと方向づけをするきっかけをつくりだす道具であり、元気を出させる「乗り物」や「如意棒」であり、探索棒であり、ゾンデであり、



世界を把握する道具でもあった。3才のM児にとって網は、さまざまな役割を果しているのである。しかし、小2のH君と、小5のN君にとって、網は小動物を捕獲するための道具であった。

このことから、「幼児には網は無理だ」との判断にたつて「網は小学校に入ってから」などと考えるはならないのである。いわゆる遊具といわれるもののなかには、虫とり網と同じように本来の機能だけをねらってはならないものがたくさんある。

ふりかえてみると、M児が「散歩に行こう」と呼びかける道具としてのインターホンさえも、この散歩活動を活性化するための道具立てのひとつであった。さらに、雨の中でも出かけるための自分の「傘」や「雨靴」、何気なく配慮されている活動的な服装や帽子、「虫かご」や水を入れる「容器（飼育用）」もそうである。ときにM児は「プロペラの飾りのついた帽子」をかぶった。その帽子をかぶれば、「空を飛びたいくなるような心もち」になるにちがいない。これらも、散歩のための道具立てのひとつである。

身近な環境のカリキュラム化を進めるとき、子どもと自然を媒介する「道具」も、十分に考慮しておかなくてはならない。小学校低学年においては、自然を直接的に把握する「虫とり網」の類だけではなくて、間接的に把握するための「ノート（カードやファイルなど）」の記録の道具も重要となる。

#### 4) 同じ場所を継続的に観察することの大切さ

100日にわたる50回ばかりの散歩コースは、わずか片道65メートルであった。しかしながら、Mが飽きてしまって「行かない」と言ったことはいちどもなかったのである。ひとりの幼児であれば、十分な活動がえられるような自然の変化を観察することができた。

散歩コースには、畦道を中心に水田・草むら・側溝・池・流れこみなど、水に関係した多彩な地形の変化もあって、たくさんの小動物がいた。とくに、のべ10匹ちかく捕ることになったカメはM児の散歩への関心を高めた。幼稚園・保育園や小学校の近くに、このような場所を捜し出すことからカリキュラムづくりは始まる。教師が、子どもの教育にかかわる地域の実態を知ることからカリキュラム化がはじまるのである。保育者や教師は、車で地域を通過（Fahren）するのではなくて、自分の足や目で地域を体験（Erfahren）しなくてはならないのである。

M児は同じコースを何度もくりかえして歩くことにより、自分の力で歩くことができはじめ、周囲の物事に目が向いた。教師も同じコースを繰り返して歩いて見る必要がある。

さらに年令が高くなり、絵や文による記録が可能となると、季節の移り変わりや、事物の変化へも目をむけていくことになるであろう。そうすると同じ場所を継続して調べることのメリットが倍加する。

#### 5) 散歩をスケジュール化、日課にすること

M児との散歩は土曜・日曜をのぞくと、筆者のいる夕刻に日課のように定例化した。顔を合わせる機会が少ないせいもあって、顔が合えばM児はすぐに「散歩に行こう」と声をかけるのであった。たとえ短時間であっても、散歩は終わると安定するのであった。

このことから、かえて1日のうちに決まった時刻にスケジュール化することもよいのではないかと考える。1日のうちに必ず散歩に行くことが定例化すると、子どもの目的意識が旺盛となり、自主的に準備をして環境に立ち向かい、散歩が子どもの生活の一部として、文字どおり「生活化」するのである。

#### 6) 「6月は室内の活動」という常識の誤り

生活化のカリキュラムづくりが進んでいる。多くの学校や保育の場での6月の活動内容を見ると、梅雨という気候を考慮して室内での遊びなどが工夫されている。これは、従来の学級活動などにもあてはまる。

水辺の生物は梅雨の季節にこそ活動が活発になるのである。M児との散歩の経験からいえば、カメ・ドンコ・ザリガニなどは、雨のあとの散歩での補穫物であった。小動物の探索や観察には、この雨の時期が適しているのである。それに、雨靴を履き、傘をもったときの幼児の表情を見るとよい。いつもと違った活動を見せてくれる。これまでのカリキュラムづくりの常識を再検討する必要がある。

### 7) 散歩の総合的性格

散歩は自然の事物との多様な出会いの場であった。しかし、散歩は自然の事物との出会いだけではないのである。それだけではなくて、いっしょにでかける仲間や大人とかかわるという意味において人間関係そのものである。子どもたちが一斉にでかけるときには、集合や集団行動なども関連してくる。そこには言葉や社会的な要素も多くふくまれている。

このたびは「自然の事物」との出会いに限定してのべたが、社会的・人間関係的な側面や言葉にかかわる問題などについては別の機会にゆずる。

### 注

- (1) 1989年12月、この家族は山口県教育委員会社会教育課の企画編集による教材用ビデオ「ひとりだちに向かって－自立」の制作にあたって、山口放送の取材に応じ、出演もしている。M児が2才3か月のときである。
- (2) M児の散歩への関心が高くなっていた7月31日、小学校のO先生が来ておられるときM児がやってきた。そのとき、M児と散歩に行くことが話題になった。筆者が「M君は、お母さんと車で帰ってきたら、おうちに入らずにおじちゃんの家に来るんよねえ。おじちゃんがいるかどうか知っちゃるんよねえ」というと、M児は「うん、車が（を？）見ればわかるもん」とのことであった。
- (3) 桑原昭徳「把る・握る・理解する－幼児の遊び、その教育的意味－」、『教育実践』第947号、山口県教育会、1990年10月。